スペイン舞踊振興 MARUWA 財団 令和 3 年度助成事業

下山静香の

おんがく×ブンガク

Vol.5

～ アンダルシアに刺さる月 ～

Federico García Lorca

〔ゲスト〕

秋本 悠希（メゾソプラノ） 佐原 敦子（ヴァイオリン）

外囿 祥一郎（ユーフォニアム） 伊左治 直（作曲 / 対談）

三枝 雄輔（パルマ） 須田 隆久（カンテ） 中川 浩之（ギター）

2022 年 6 月 30 日（木） 18:45 開演

会場：座・高円寺 2

主催：ミューズ・グラシア 協力：荒川和重

後援：インスティトゥト・セルバンテス東京 / 日本スペインピアノ音楽学会

＜楽曲について＞

伊左治 直 Sunao ISAJI：虹の定理　　(Pf)下山 静香 / (朗読)須田 隆久

ロルカを愛する伊左治さんが、ロルカの詩『7 人の乙女たち（虹の定理)』に触発されてピアノのために書かれた楽曲。多彩な顔を持つ伊左治ワールドですが、ロルカとの邂逅で生まれたこの音楽もまた、音となって空間に広がるたびその奥深さをのぞけるような気がします。

ジョナサン・ダヴ：カット・マイ・シャドウ（メゾソプラノとピアノのための）
［1.驚き　2. ギター　3. 枯れたオレンジの歌］　　(mezzo sop.)秋本 悠希 / (pf)下山 静香
Jonathan Dove: Cut my shadow　Three songs for mezzo-soprano and piano
［1.Surprise　2.The Guitar　3.Song of the Dry Orange Tree］(English translation by G.Edwards)

ジョナサン・ダヴは「ブリテンの正統的後継者」ともいわれ、英国を代表する現代作曲家のひとりです。グラインドボーン・オペラからの委嘱作品《フライト》や、オペラ《ピノキオの冒険》が大成功を収めてその地位を確立、オペラ以外にも合唱曲、カンタータなど声楽にかかわる作品が特によく知られています。《カット・マイ・シャドウ》は、今回の公演に向けてロルカのテクストを使った歌曲を集めていくなかで出会った作品ですが、秋本さんに「こんな曲があるのだけれど・・・」とお話ししてみたところ、なんと、ロンドンでダヴに興味を持たれてその楽譜も持っていらっしゃるとのお返事で、これはなんと奇跡的なこと！と盛り上がったのでした。

フランシス・プーランク：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ
Francis Poulenc: Sonate pour violin et piano　　(vn)佐原 敦子 / (pf)下山 静香

30 歳の若さで飛行機事故の犠牲となったフランスの天才的ヴァイオリニスト、ジネット・ヌヴーの委嘱を受けて作曲。ヌヴーのヴァイオリンとプーランク自身のピアノ演奏で、1943 年に初演されました。管楽器の作品が多く、「弦楽器は苦手」と公言していたプーランクにとって、ロルカに捧げたこの作品が唯一のヴァイオリンソナタとなっています。ピツィカートの効果や、ピアノのセクションにも表れるギターのイメージ、そして直接的な感情の表出はスペイン的な性格を感じさせます。第 3 楽章で、容赦ない衝撃音が 2 発鳴り響いてからのラストは、どうしてもロルカの最期を連想してしまいます。プーランク自身はこの箇所について、「生の躍動感が、悲劇的なコーダに突然砕かれる」とのみ述べているようです。

＊　＊　＊　休　憩　＊　＊　＊

【インタビュー対談】
作曲家・伊左治 直氏を迎えて

伊左治 直：ガルシア・ロルカによるパラフレーズ　　(euph)外囿 祥一郎 /(pf)下山 静香

ユーフォニアム奏者・外囿祥一郎さんの委嘱により作曲され、2017年9月、王子ホールでのリサイタルで初演されました。ロルカ採譜のスペイン古謡、耳親しんだメロディが次々に登場しながら新鮮さも感じさせてくれる曲調に心が躍ります。全音から出版されている楽譜には、〈ラ・タララ〉を元にアンコールピースとして書かれた〈ラ・タララ・ファンタジア〉も収録されています。

【 Flamenco 】

カンテ、ギター：須田 隆久　ギター：中川 浩之　パルマ：三枝 雄輔

〈シギリージャ〉

〈月よ、月よのロマンセ〉　Romance de la luna, luna

〈タラント〉　（バイレ：下山 静香）

シギリージャは、カンテ・ホンドとされる曲種の中でも嘆きが深く、重要なものです。ロルカは、カンテ・ホンドに関する講演の中で、「シギリージャに脈打つ苦しみ、嘆きは、スペイン全土をみても匹敵するものがみつからない」とまで述べていて、強い思い入れが感じられます。詩集『カンテ・ホンドの詩』には、「シギリージャの詩」と名付けられた一群の詩が収められています。

「月よ、月よのロマンセ」は、『ジプシー歌集』のなかでも大変知られている詩です。ベースにあるのは、「子供に月を見つめさせすぎると連れていかれてしまう」という、アンダルシア地方の言い伝え。ロルカの詩に多く登場する「月」が、ここでも不吉でミステリアスな象徴として存在感を放っています。本日は、この詩が使われているカンテをブレリアスで唄っていただきます。

タラントは2拍子系で、カンテ・レバンテ（東アンダルシアのカンテ）またはカンテ・ミネロ・レバティノ（東方の鉱山の歌）と呼ばれるなかで唯一、踊りを伴える曲種となりました。ギターには少しアラビア風の装飾もあらわれ、音楽的にも独特な雰囲気があります。タラントの背景には、命の危険と隣り合わせの暗い炭鉱での仕事とそれにまつわる厳しい生活があるといわれ、悲しみや苦しみが際立ちます。しかしそれでも生きていくという力強さも備えた、情感の強いパロとなっています。

［ガルシア・ロルカ 略年譜］

1898　グラナダ近郊のフエンテ・バケーロスに生まれる。
1909　一家でグラナダに移る。
1915　グラナダ大学法学部および文学部に入学。
1918　最初の著作『印象と風景』自費出版。
1919　マドリードの学生館（Residencia de estudiantes）に入館。
1920　最初の戯曲『蝶の呪い』上演（マドリード）。ラ・アルヘンティニータが蝶の役。

1921　最初の詩集『詩の本』出版。マドリードの文壇に登場。
1922　グラナダでファリャらとともに「カンテ・ホンド祭」を開催。
1927　詩人ルイス・デ・ゴンゴラの 300 回忌記念イベントが開催される。(「27 年の世代」)
　　詩集『カンシオーネス』出版。
1928　詩集『ジプシー歌集』出版。一気に名声が高まる。
1929　ニューヨークへ渡る。コロンビア大学の学生となる。
1930　キューバに滞在後、帰国。
1931　共和国臨時政府樹立。詩集『カンテ・ホンドの詩』出版。
　　ラ・アルヘンティニータと「スペイン古謡」のレコーディングを行なう。
1932　移動劇団『バラッカ』結成。共和国政府により支持・承認される。
1933　戯曲『血の婚礼』など上演。10 月にアルゼンチンへ。
1934　ウルグアイにも 20 日間滞在。4 月に帰国。戯曲『イエルマ』上演。
1935　詩集『イグナシオ・サンチェス・メヒーナスへの哀悼歌』出版。
　　政府の補助犬削減の影響で、バラッカの巡回公演ができない状況になっていく。
　　戯曲『老嬢ドニャ・ロシータ』上演。詩集『ガリシアの六つの詩篇』出版。
1936　詩集『最初の歌』出版。戯曲『ベルナルダ・アルバの家』完成。
　　7 月 14 日、マドリードからグラナダへ。17 日、フランコ将軍派のクーデターから内戦勃発。
　　20 日、グラナダ叛乱開始。
　　8 月 18 日、グラナダ近郊ビスナールで銃殺される。

♬ガルシア・ロルカへのオマージュ作品および、詩のテクストを使用した楽曲（一部紹介）

◆フランシス・プーランク《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》(ガルシア・ロルカの思い出)
◆フランシス・プーランク《ガルシア・ロルカの 3 つの歌》
◆シルベストレ・レブエルタス《フェデリコ・ガルシア・ロルカへのオマージュ》
◆ドミトリ・ショスタコーヴィチ《交響曲第 14 番「死者の歌」》
　　＊第 1 楽章、第 2 楽章にロルカの詩（ロシア語訳）が選ばれている。
◆ジョージ・クラム《いにしえの子供の声》ガルシア・ロルカの詩によるソング・サイクル
　　(ソプラノ、ボーイソプラノと室内アンサンブルのための)
◆池辺 晋一郎《ガルシア・ロルカの 5 つのシャンソン》(男声合唱組曲)
◆伊左治 直：《Lluvia 雨》《僕の少女は海へ行った》《あたらしい歌》(以上 合唱曲)
　　ラジオオペラ「密室音響劇《血の婚礼》」《ガルシアは寒かった》(ピアノ曲)　ほか
◆林 光《グラナダの緑の小枝》(女声合唱とピアノのための)

など

次回＜おんがく×ブンガク＞ vol.6 は・・・　2022 年 11 月 18 日（金）

没後 100 年「マルセル・プルースト編」 会場：霞町音楽堂

音楽との関わりも深い『失われた時を求めて』の世界へ！　マチネ、ソワレの 2 公演を予定

一般 4000 円　グラシア会員 3500 円　学生 2000 円

コンタクトはこちらから →【下山静香 Official Site】www.https//shizukagracia.com